南極望遠鏡で探る、遠方銀河団の 隠れた銀河BH形成

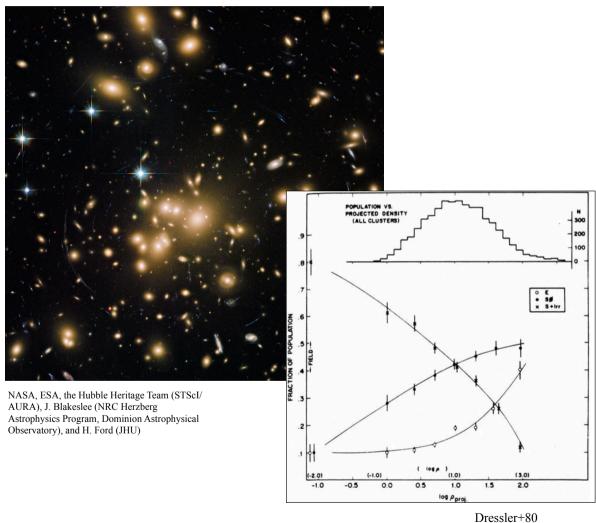
久保真理子(愛媛大学)

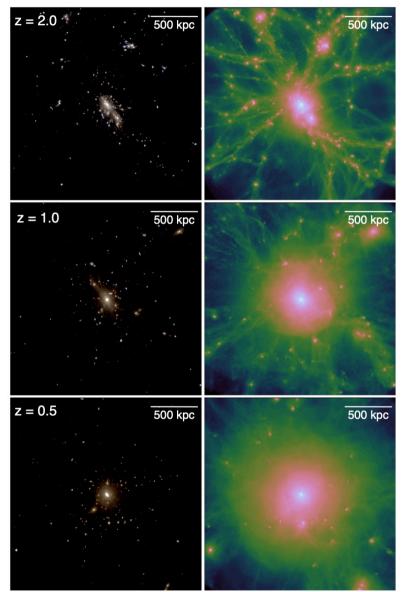
南極から遠赤外線-テラヘルツ波で探る宇宙 2022-03-14

Table of contents

- 原始銀河団と隠れた星形成とAGN
- SPICAでの検討
- 南極望遠鏡への展望

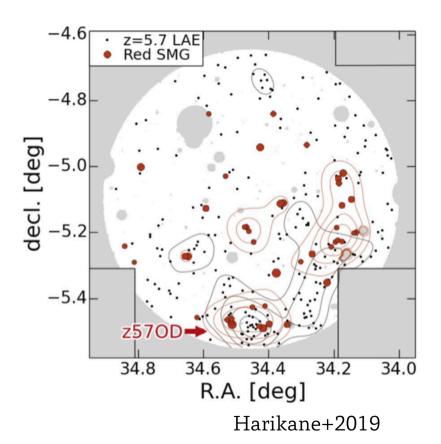
銀河の環境依存性

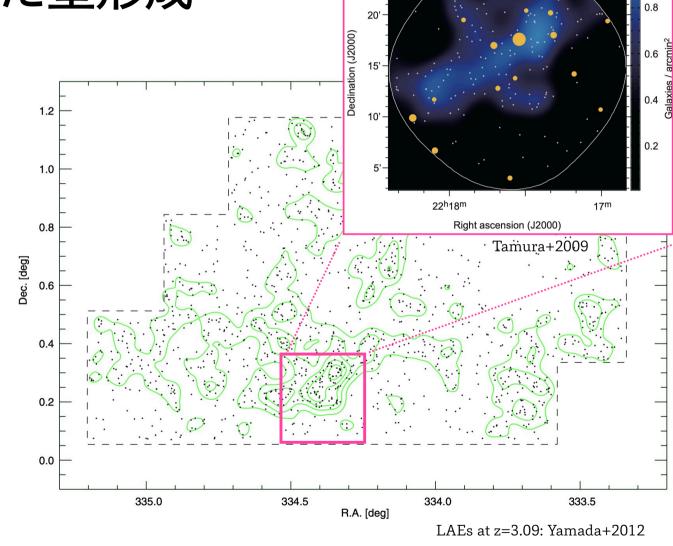




sler+80 Tremmel +19

原始銀河団と隠れた星形成

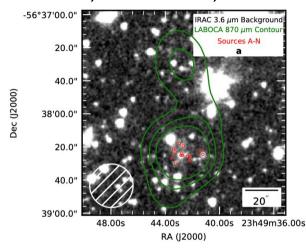


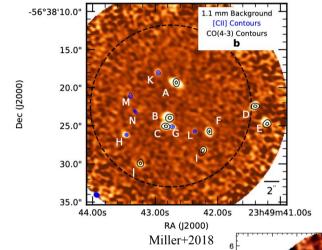


+0°25'

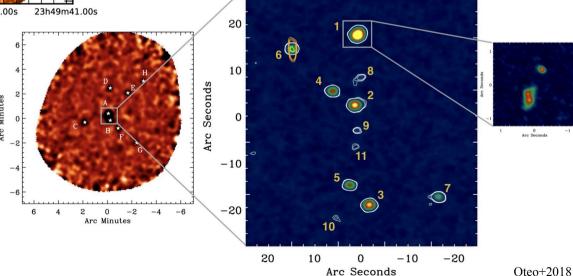
原始銀河団と隠れた星形成

SPT, Herschel, Planck sourceとして発見された原始銀河団

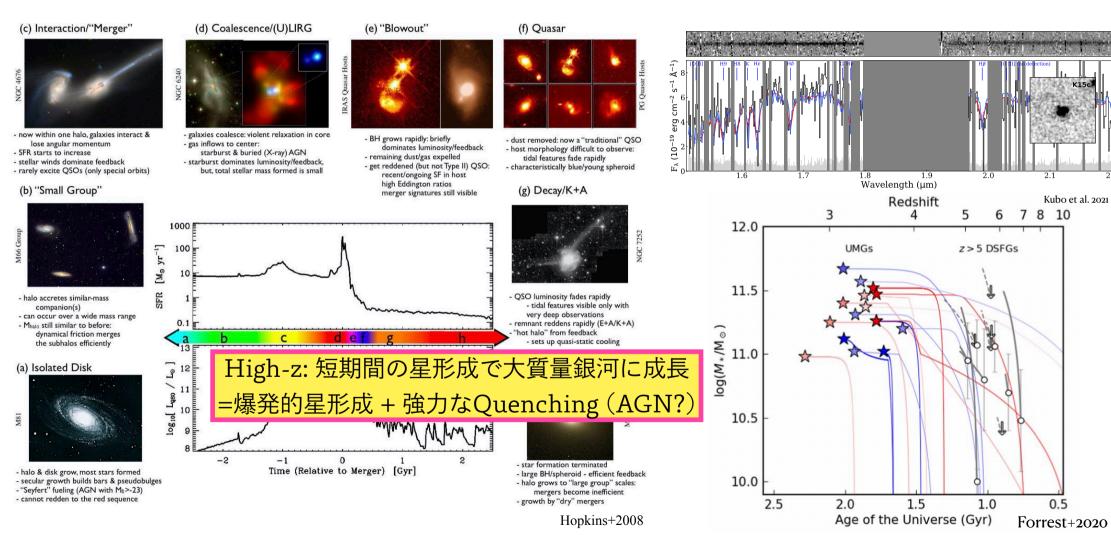




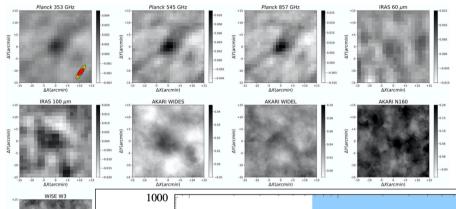
SMGの群れがS_870 um ~ a few 10 mJyのSingle sourceとして発見、高分解能+分光観測で同定 (SPT high-z bright点源の10%?, e.g., Wang+2020)。 原始銀河団中心でBCGができた時期のレアなスナップショットだとされる。



原始銀河団と隠れた星形成とAGN



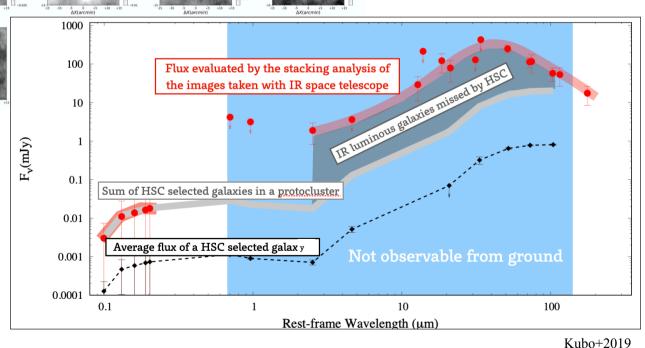
原始銀河団と隠れた星形成とAGN

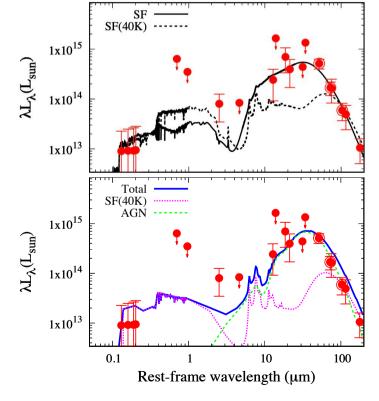


原始銀河団用のX線観測が必要で困難 + dusty (Kubo+2013)

可視光探査によって発見されたz~4 原始銀河団の、赤外線全天観測スタック解析で見積もった、原始銀河団一つあたりの平均的総フラックス

AGN+starburst and/or young hot starburst?





SPICAでの検討

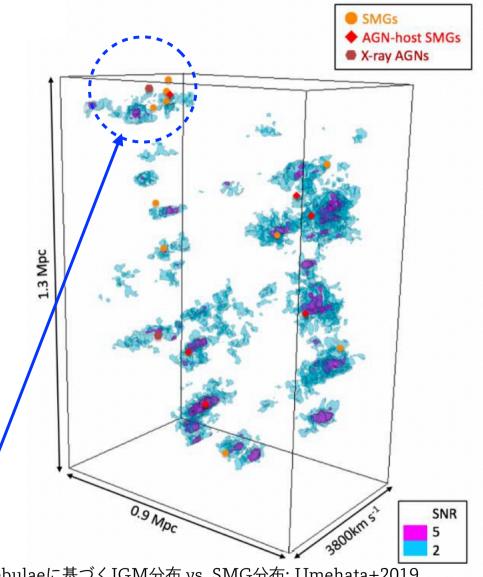
- 原始銀河団ではダスティな星形成・AGN活動も活発。ただし中遠赤外線観測がないと検出・切り分けは 困難でSPICAが重要。
- SMI輝線・SAFARI赤外線撮像 SED観測から、原始銀河団、遠方 電波銀河の星形成活動・AGN活動 の包括的理解を期待していた。
- ・ 探査よりは既知の原始銀河団・遠 方電波銀河周辺のフォローアップ。

表 3.1 銀河ブラックホール進化班の構成

氏名	所属	主な担当章節
泉拓磨	国立天文台	§ 3.1, 3.4
市川幸平	東北大学	§ 3.3
今四昌僾	国立大文台	§ 3.2
梅畑豪紀	理化学研究所	§ 3.3
久保真理子	国立天文台	§ 3.3, 3 <mark>.</mark> 7
竹内努	名古屋大学	§ 3.5, 3.7
田村陽一	名古屋大学	§ 3.6
鳥羽儀樹	日本学術振興会/京都大学	$\S~3.5$
長峯健太郎	大阪大学	§ 3.4
橋本拓也	筑波大学	§ 3.6
播金優一	日本学術振興会/国立天文台	$\S~3.5$
馬場俊介	日本学術振興会/国立天文台	§ 3.4
山下拓時	国立天文台	§ 3.3
和田武彦	宇宙科学研究所	装置性能について

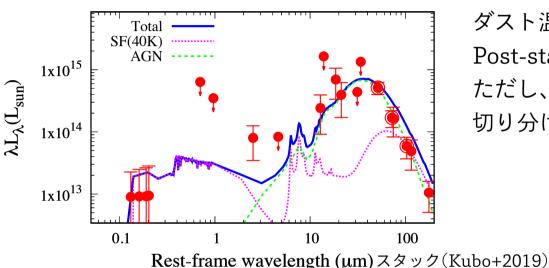
南極望遠鏡への期待

- 星形成もAGNも活発であり、遠赤外線SEDの 制限が重要である。
- 面密度~a few per deg²。大規模構造が1degに 渡って広がっていることも。広視野観測が重 要。統計的研究・原始銀河団探査に期待。
- 原始銀河団では、複数のSMGが固まった領域 がしばしば見られる。Single dishの浅い観測 で1個の天体として検出できる。
- ただし、多様な銀河からなる銀河群を見ている ことも。高分解能・多色のフォローアップ観測 が不可欠である。



Ly α nebulaeに基づくIGM分布 vs. SMG分布: Umehata+2019

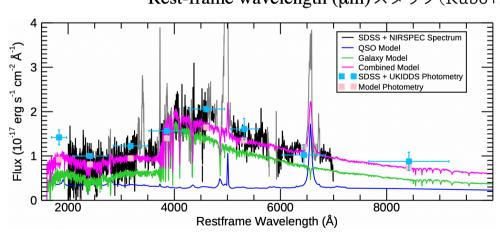
原始銀河団銀河赤外線SEDの解明



ダスト温度やSFRの推定には遠赤外線SEDが不可欠。

Post-starburst QSOのようなものも。

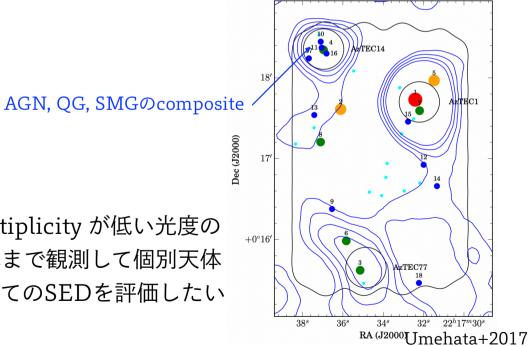
ただし、中間赤外線の輝線診断が使えないとAGN/星形成の 切り分けに不定性が残る。



Post-starburst QSO (Swiggum+2022)

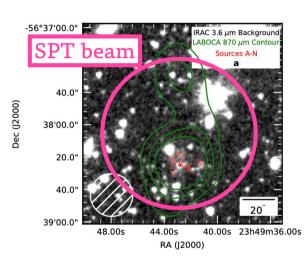
Dec (J2000) multiplicity が低い光度の 天体まで観測して個別天体

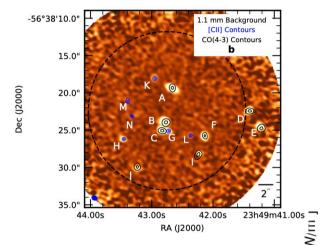
としてのSEDを評価したい



原始銀河団の大規模統計研究

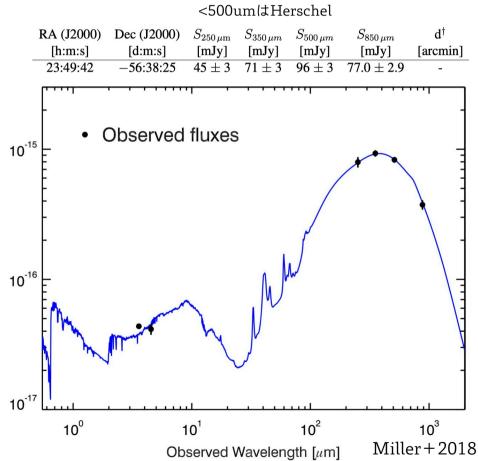
最も星形成が活発な時代の原始銀河団コア





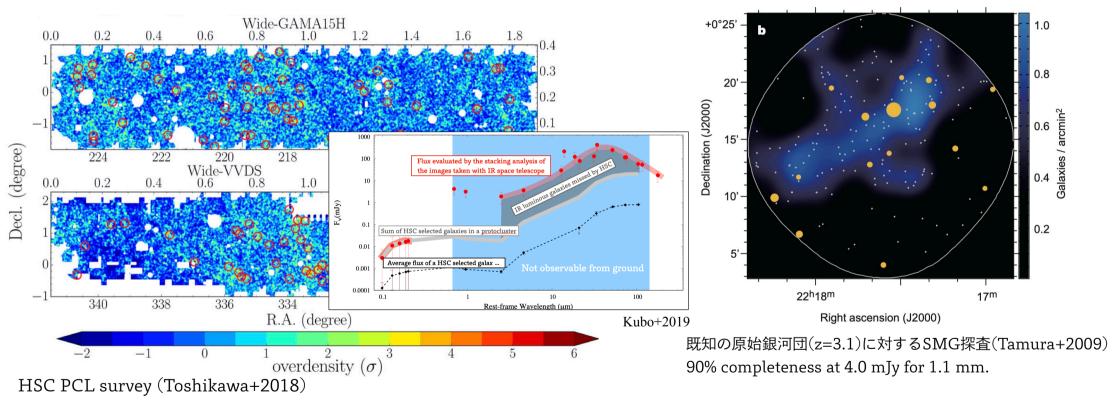
F850~数10 mJyでSEDから遠方らしい点源として検出。 BCGの星形成史を紐解く重要なターゲット。

SPTで発見された明るいhigh-z点源の大半は重力レンズ天体だが、20"分解能で multiplicity 天体として分離可(Wang+2020)。 a few 10 deg²に一個程度(Greenslade+18)なので100平方度以上掃けると嬉しい。+ blind search for e.g., [C II]



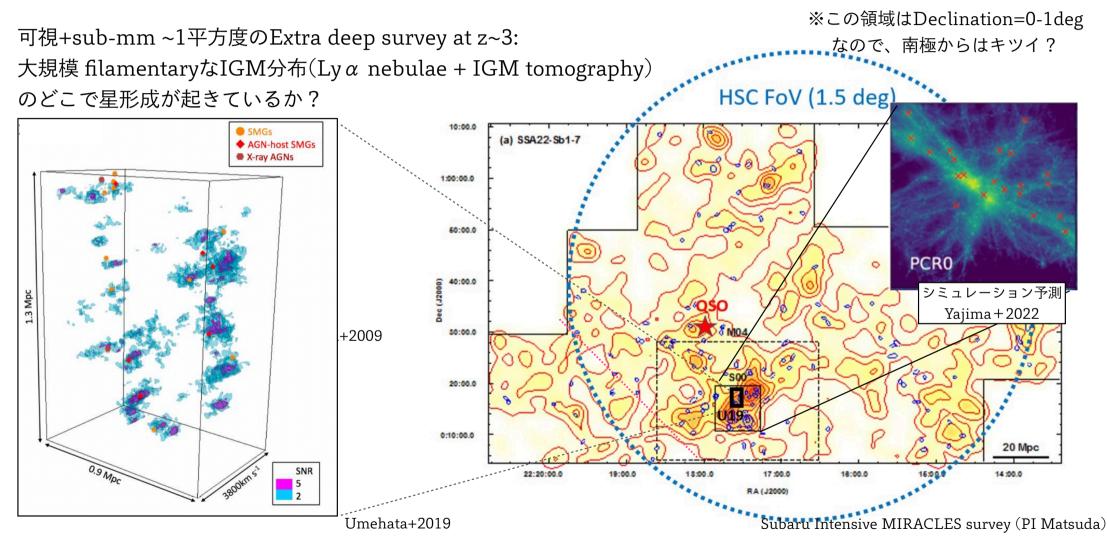
原始銀河団の大規模統計探査 @ sub-mm

原始銀河団のSMG探査 & SMG密度超過による原始銀河団探査



おおよそz=3-4原始銀河団の数密度がa few per deg2程度なので、検出限界 1mJy 多色で10-20 deg2 くらい掃けると、SFR = 数百Msun/yr程度までのSMGの検出が期待できる。

Cosmic web & starburst



Summary

- 原始銀河団の隠れた星形成AGNを特徴づけるには遠赤外線SEDが不可欠。SPICAではSMI輝線やSAFARI遠赤外線SED等から既知の原始銀河団・遠方電波銀河周りの銀河BH進化を包括的に理解することが期待されていた。
- 一方、原始銀河団の統計的研究には南極望遠鏡(THzがz=2-4に有利)が必要。原始銀河団の星形成AGN活動のレアなピーク期から、各時代の平均的な活動性まで追うことができる。
- HSC, Rubin, Roman, Euclid, G-REX etc..等の可視近赤外線広域撮像、ALMAによる高分解能撮像との組み合わせも不可欠。
- Multiplicityの高い天体の遠赤外線SEDの扱い、星形成/AGNの切り分けは難しい。